



キャンパス・コラム

パリの図書館

冬休みを利用してフランスへ行った。目的は図書館で文献を調べることと僕の専門（フランス17世紀演劇）の観劇だ。

年末年始とはいえオペラと芝居をあわせて5作見られたのは収穫だった。もう一つの目的はパリの国立図書館で資料の閲覧だ。朝9時に開館するから、8時半前後にホテルから図書館に向かう。パリの朝は遅い、ホテルを出る頃はまだ夜空で、街燈が消えるのは8時半、夜が明けてもたいていは曇りで一日中日の光を見ないほうが多い。僕が行くのは新館のほう、といっても開館してもう10年くらいになる。パリのはずれ、南東のセヌ川沿いにある。変わったことは図書館から向こう岸のベルシーに新しい橋が架かったことくらいだ。

国立図書館の休みは12月31日と1月1日のみで、短期滞在者には助かる。閲覧室は地下の

1階と2階にある。地下といっても真ん中が巨大な庭園になっていて、その吹抜けの周りを閲覧室が回廊風に取り囲んでいる。開放的で地下という気はしない。地下1階の閲覧室は中間試験の勉強の学生で入ることができない。地下2階のほうは一定の資格、研究者・教員であることが要求され、入るのにコンピュータで座席の予約を必要とする。当日の入館は普段なら込み合っていて無理だが、さすがにこの時期は利用者が少なく助かる。本の請求もコンピュータで、出てくるまで1時間くらいかかる。書庫から窓口の本が届くと座席のランプが点滅し、それを待って取りに行く。文献を調べるといっても、短期滞在では実物を確認するくらいのことしかできない。調査不足で知らなかった文献が14、5冊あった。存在を確認した本は、日本に帰ってから専門の本屋に注文することになる。結局、幸いなことに8割方の本が日本で注文できた。

やれやれ、それでも後の5、6冊はまた行って読まなくてはならないのか。

広報委員 橋本 能 (商学部教授)

編集室

最初は、好奇心に満ちた、1匹の若いサルは何気ない行動だった。それが2匹、3匹と伝播し、ついに群れ全体の習慣・行動と化した。
宮崎県幸島の日本サルで見られたイモ洗い行動の観察例です。
象徴的にいえば、99匹目までは個別のふるまいだった。100匹目のサルが見習ったとき、劇的な変化が起きた。群れ全体に及び、場所を超えて高崎山のサルもイモ洗いを始めていた。これを「百匹目のサル」と呼んだのはライアル・ワトス

ン(『生命潮流』)です。
高崎山は同時的ではない、とサル学者の批判もあるのですが、量が質に転換する臨界点(閾値)、そのとき系を超えて同じような現象が起きる——シンクロニシティとかコインシデンス(同時生起)というタームや文化現象は想像力を刺激します。
若者サルはすぐに順応したが、年長集団は頑と見向きもしなかった、というのにも妙に“人間的”な話。
「平成元年生まれ」の新入生を迎えた各大学は、改革のただ中にあります。中央大学において、「百匹目のサル」は……と想像をめぐらしました。
(広報課 田中紘太郎)

Hakumon

ちゅうおう

2007

春季号

2007年(平成19年)4月1日発行 No.201

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉

『Hakumonちゅうおう』編集室

☎042-674-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026
東京都墨田区両国3-1-12
☎03-3631-8141